山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第43号
令和6年6月10日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより

『水可美』における「防長歌壇」の確立

中　原　　豊（中原中也記念館・館長）

歌誌『水可美』には短歌とともに多くの評論が掲載されている。その内容を概観すると、歌論や古典および近代歌人の研究などに並んで、いわゆる「防長歌壇」の歴史をたどる内容がひとつの特徴をなしていることがわかる。創刊号（1933< 昭和8> 年2月）でいえば、御薗生翁甫「大内氏歌壇概観」と大田哀歌鳥「防長歌壇の回顧」がそれにあたるが、後者は『水可美』自体の活動に直結する時代を振り返るものとして、以後も企画として継続されていく。

大田の回顧は記憶のみを頼りにしたものだが、当時の作歌活動の場として、各地域で刊行されていた小規模な文芸誌とともに、『防長新聞』『関門日日新聞』といった地方紙に設けられていた歌壇が重要な位置を占めていたことがうかがえる。「防長歌壇の回顧――其の二――」という副題で第1巻第3号に掲載された田村盛一（小鳥）の「木霊時代の回想」は、自らが主宰した文芸誌『木霊』について、その前身となる回覧誌、同人誌などの活動を含めてその歴史を丁寧にたどっており、主要なメンバーの代表歌とその評も添えられている。

また、山口中学校在学中に『木霊』の活動に加わり田村を恩師と仰ぐ小川五郎は、後に参加した歌誌『白梅』の歴史を、田村に倣うかたちで丹念にたどっている（「白梅三年史」（2-6）、「白梅三年史」（2-7）、「白梅三年史（三）」（2-8）、「白梅三年史（三）」（2-10））。その他、津崎皓（小方白夜）「あの頃のことども（白梅初期及白夜短歌会時代）」（1-8）、原阜（氏原大作）「「小さき芽」の思ひ出」（1-10）、宇田川正明「防長新聞歌壇の回顧」（2-12）、山根芳一「あけぼの第一巻、二巻概況（一）」（3-2）に始まる歌誌『あけぼの』に関する連載、吉本万二郎「あけぼの回顧録」（4-12）など、さまざまな書き手によって先行する歌誌・文芸誌の足跡を綴っている。

「白梅三年史」（2-6）において、小川は〈防長歌壇史上に於ける「白梅」の位置を知らしめその演じた役割を明確にしておこうとするのがこの稿の目的である〉としている。これに先立って小川は「水可美一年史」（2-2）をまとめているが、一連の歴史探訪の目的は、すべて「防長歌壇」史上の位置づけであったと捉えてよいだろう。中央歌壇を一方に置きながら、ひとつの地方歌壇としての「防長歌壇」という概念を確立するとともに、そこに自らの活動の基盤を置こうとしていることがうかがえる。

こうした流れは村田秀雄「山峡回顧録」（5-4）あたりで終わっているように見える。その時期、すでに『水可美』は山口県内各地に支社を置く有力な歌誌へと成長しており、まさしく「防長歌壇」を体現する存在となっていたといえるだろう。一方で、同号が刊行された三ヶ月後の1937< 昭和12> 年7月には盧溝橋事件が勃発し、翌年3月に刊行された第6巻第3号では「陣中の歌」として竹内八郎ら出征した会員の作品や「事変歌を見る」と題された評が掲載されるなど、『水可美』誌上でも次第に戦時色が強まっていく。

『水可美』は1940< 昭和15> 年9月に村尾茂明「水可美回顧録」、河内豊「水可美の想出」などを掲載した終刊号とともにその歴史を終え、『水可美』が確立した「防長歌壇」は、その翌年に結成される山口地方短歌連盟や山口県地方文化協会などの戦時体制に組み込まれていくことになる。

歌誌『水可美』と友廣保一のこと

加　藤　禎　行（郷土文学資料センター・研究員）

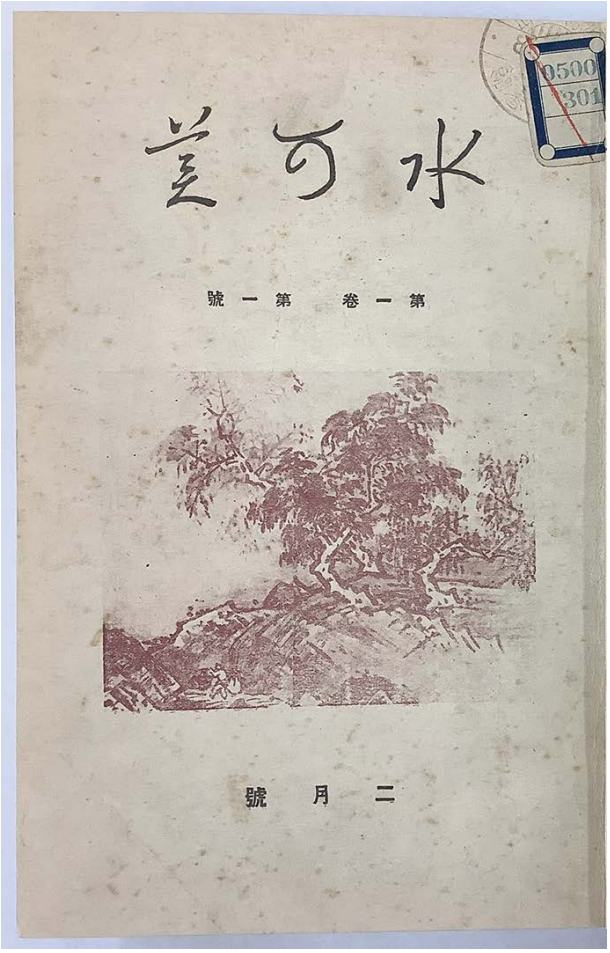
吉田常夏が編集した『燭台』第五年第八号（一九三一〈昭和6〉年八月、燭台詞寮）は、雑誌『燭台』衰退期の刊行で、紙片を二つ折にした全四頁の片々たる号だったが、表紙には「九月号予告」として「▽「燭台」は山口歌壇の牙城「あけぼの」と合同して益々進出す」と威勢の良い煽り文句が掲げられた。

この号に掲載された吉田常夏「陳謝」は常夏の消息を伝えているが、「◇然し七月は病後の私に取つては過ぎる程の活動をした。十八日には山下寛治氏と共に山口の座談会に臨み、翌日は萩の座談会に列席して二泊し、更に二十六日には小倉の座談会に会するなど、東奔西走の形であつた。」、「◇山口の会合は宇佐川正明氏を始め、主として藤吉徹、山下信正両氏が肝入りして三十名に達する盛会を見た。山口は私の故郷で私は立派に錦を飾り得たことを感謝する。殊に小川五郎氏、山根芳一氏達の好意に依て「あけぼの」の加盟を土産としたことは望外の喜びであつた。」と、『燭台』『あけぼの』の合流案が報告されている。

『あけぼの』は、一九二六〈大正15〉年八月から一九二九〈昭和4〉年四月まで山口市で発行されていた歌誌で、『あけぼの』終刊に伴い『燭台』と合流して山口県内の歌壇を束ねる構想であったことが伺える。『燭台』は一九三二〈昭和7〉年四月号を発行する頃にはその活動を終えつつあり、両誌の合流案は実現しなかったが、こうした防長歌壇を新旧東西に亘って包摂していくという文脈を継承しつつ歌誌『水可美』は創刊された。

「新刊紹介」（一九三三〈昭和8〉年二月一〇日『防長新聞』夕刊）として掲げられた紹介文は以下の通り。「▲水可美（創刊号）

予て山根二郎、村田常夏氏等によつて防長歌壇の統制を図るべく計画されてゐたが今度それがいよいよ実現し山口高等学校教授小川五郎氏が編輯者となつて雑誌『水可美』の創刊号が発行されたこれによつて防長歌壇の合同統制の実をあけるのみならず更に荒瀬、末田、西原の諸大家の参加を求めて防長新旧歌壇の親和発達を図ることになつた、同誌は七十余頁で表紙の絵は毛利公爵家所有の有名な画聖雪舟の代表作『山水図巻』題筌『水可美』は厨川山口図書館長の執筆で風韻掬すべきものがある（中略）兎に角歌の新派旧派を問はず防長二州全体の同好者の短歌の創作、研究、批評を集め大成的に邁進しようとするもので曽て本県で其比を見ない内容の充実せる短歌誌である」。この記事は創刊号掲載の小川五郎「編輯後記」に準拠して書かれたもの。村田常夏とあるのは吉田常夏の誤植ではなく、同号を名乗った山口県の歌人。題字を揮毫した厨川山口図書館長とあるのは、もちろん厨川肇のことである。



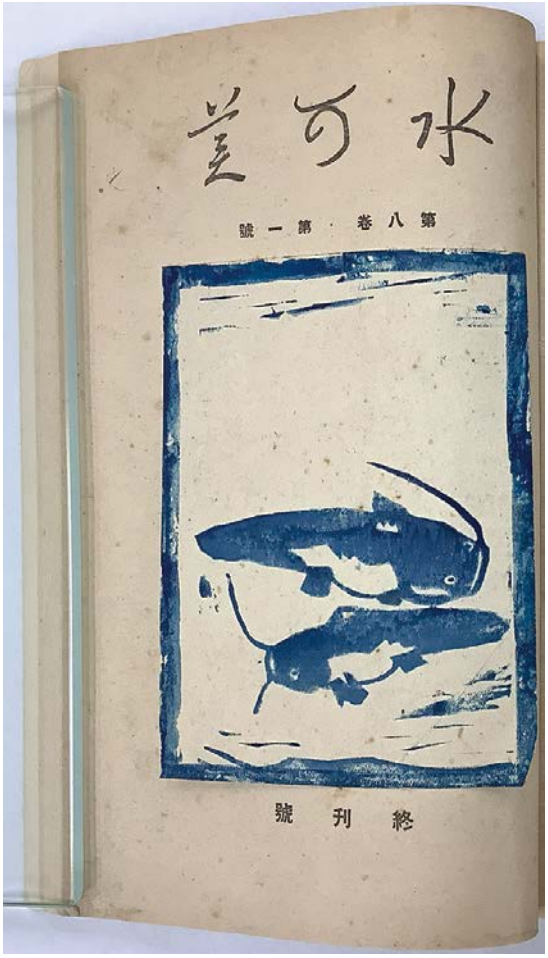
『水可美』第１巻第１号表紙

歌誌『水可美』は一九三三〈昭和8〉年二月から一九四〇〈昭和15〉年一月まで、七年間に亘って全七五冊が刊行された。上記の「新刊紹介」を見ると編集者は小川五郎であるように見えるが、実際は同人の輪番による編集であり、小川五郎、山根芳一、友廣保一、宇佐川正明、山下信正、中野三郎、田村盛一、池部鴻ほかが交代でその務めに当たった。ただし発行所は一貫して友廣保一が経営した古書店第三書房に置かれていた。

創刊当初は「山口市札ノ辻　水可美発行所」と奥付に掲げられ、山川千冬「編輯後記」（『水可美』一九三九〈昭和14〉年一月号）が「猶、本誌の発行所たる第三書房は市内米屋町一七に支店を設け去る十二月二十五日開業、依つて事務の都合上今後

発行所は同支店に置くことになつた。山口駅通を米屋町へ廻つた角より二軒目に付、会員各位御来山の節は何卒御立寄下さい。」と事情を伝えるように、奥付には「山口市米屋町　水可美発行所」と掲げられていく。この古書店第三書房は、後年、歌人としての友廣保一が「われは無口中也さん又無口にて第三書房に向ひ坐りき」（「昭和四十六年～四十九年」歌集『流るる音』一九八八〈昭和63〉年十月、石川書房）と歌ったように、やまぐちの文学者たちがゆかりを持った古書店でもあった。

『水可美』特集号としては、以下のように十冊が刊行されている。「水可美一周年記念号」（一九三四〈昭和9〉年二月号）、「青蜩批評号」（一九三四〈昭和9〉年五月号）、「かたばみ批評号」（一九三四〈昭和9〉年九月号）、「長和義雄・中村志保子追悼号」（一九三四〈昭和9〉年十一月号）、「山根芳一追悼号」（一九三五〈昭和10〉年十一月号、「五十号紀念／自選歌集号」（一九三七〈昭和12〉年三月号）、「小島知止追悼号」（一九三七〈昭和12〉年四月号）、「戦士慰問号」（一九三八〈昭和13〉年十月号）、「津崎晧追悼号」（一九三八〈昭和13〉年十二月号）、「秋沙批評号」（一九三九〈昭和14〉年十・十一月号）。同人の歌集を批評したもの、死去した同人やゆかりある歌人を追悼したものが並ぶが、「戦士慰問号」といった時局の進行に対応した特集号はやはり目を引く。すでに一九三七〈昭和12〉年七月の盧溝橋事件以降、日本は中華民国政府との戦争に突入していた。



『水可美』第８巻第１号表紙

友廣保一「後記」（『水可美』一九三九〈昭和14〉年十・十一月号）では、終刊間近の『水可美』の動向が「会員の方々には誠に相済まない次第ですが水可美の発行を二ヶ月程休み度いと思ひます。／私が少し疲れたことが一つ、会計状態が少しも思はしからず、又同人多数は勿論刊行せよとのことでしたが、同人の中には時局柄暫時発行を遠慮した方がいいといふ意見もあり、又中には同人の熱が以前の如く高まるまで待つた方がいいといふ見方もあつて、／結局この十一月号を発行したのち、十二月号及び、一月号の二ヶ月を休刊し、一月中旬までに同人集合の上、同人各自の意見とその後の会計及び会員などの状態を考慮に入れて、再度刊行を続行するか否かを最後決定することに致しました。」と伝えられている。この「後記」からは、時局の進展、加えて用紙資源の払底や用紙価格の高騰が雑誌の経営を圧迫していたことを窺っていいだろう。

一九四〇〈昭和15〉年一月、第八巻第一号をもって歌誌『水可美』は終刊している。終刊号には村尾茂明「水可美回顧録」、河内豊「水可美の想出」、山中孝俊「無題」などの回想文が掲げられ、友廣保一が「終刊号後記」を執筆している。友廣保一は詳細な事情など語らず、「この号を終刊号としてお届けいたすことになりました。通巻七十五号、七年に渡つての刊行でありましたが四囲の状態を考慮して思ひ切つて廃刊に決定したわけです。」と静かに会員・読者への惜別の辞を述べている。歌誌『水可美』は、下関市の吉田常夏が雑誌『燭台』から送り込んだ息吹を受けて、山口市でしっかりと芽吹き、昭和戦前期のやまぐちの文学を後世に伝えている貴重な短歌雑誌として、現在でもその価値を失っていないと言えるだろう。

夫婦で詠む―『水可美』同人の中野三郎と中野稲子

池　田　　誠（中原中也記念館・学芸担当課長補佐）

『水可美』では昭和8(1933) 年2月の創刊時から2年ほどの間、同人による吟行を頻繁に行っているが、それらに夫婦で参加しているほぼ唯一の存在が、中野三郎・稲子夫妻である。吟行は主に山口県内の景勝地を目指して、主要同人10名ほどで行うことが多かった。

昭和6年6月18日に催された長門峡への吟行に、三郎と稲子は夫婦で参加。昭和8年8月発行の第1巻第7号に「長門峡」を題詞とした短歌をそれぞれ10首ずつ発表した。さらに翌月発行の第1巻第8号には、ともに「阿武川下り」を題詞とした短歌を発表。いずれも吟行の成果である。

第1巻第8号掲載の小川五郎「長門峡吟行記」によれば、阿武川下りは、現地で同人の池部鴻が提案し、〈忽ち可決〉され、実行に移されたという。歩きと自動車で川舟乗り場まで行き、川舟に乗ったのは15時頃と、やや遅い時間からの川下りである。

〈谷川は白浪立ちて行く水のしぶきは飛びぬ吾が船の上に〉（中野三郎）

〈阿武川の早き瀬を下る吾が船に水しぶきあぐるはすがすがしけれ〉（中野稲子）

川を北に萩方面へ下り、萩の河口についた頃には夕方になっていた。

〈日暮がた河口近く下りきて入日かげろふさざ波を見つ〉（中野三郎）

〈夕なぎの萩の海辺につひに来つ入日見つつ心たらへり〉（中野稲子）

同じ場所でありながら、少し違う視点から歌が詠まれていて、立体パノラマ写真を見るかのように、克明に感じられるのが面白い。

三郎と稲子の短歌は、日常吟も興味深い。二人は家業を共働きして暮らしていたと思われる。吟行での作歌以外でも、同じ出来事を歌題としていることが多い。

稲子には、病に苦しみながら詠んだ歌が多く見られる。『水可美』第3巻第3号（昭和10年3月）では、床につく稲子と看病する三郎が、それぞれ歌を寄せている。

〈夜もすがらはげしき痛みのきはまりて現し身はあはれ声さへいでず〉（中野稲子）

〈陣痛に似たる苦しみありと云ふ妻の言葉のかりそめならず〉〈あらあらしく叱りゐし妻の病みてより吾がおろかさのかへりみらるる〉（中野三郎）

〈つね父になじまぬ吾子よ吾が病めば素直に父に抱れて眠りし〉（中野稲子）

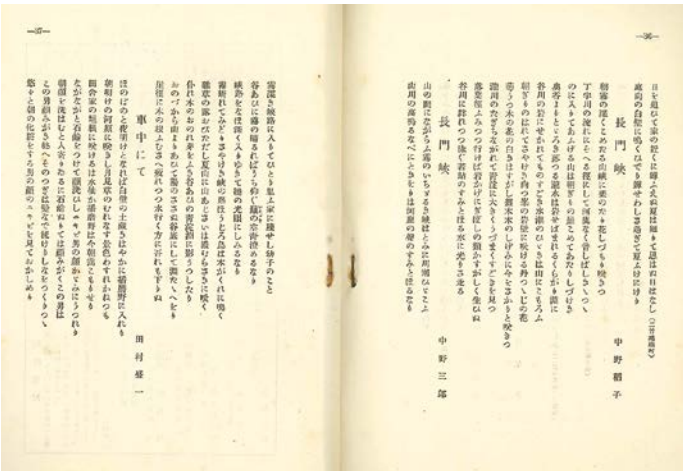
〈常なつかぬ篤はいとし妻の病み吾れによりくも昨日も今日も〉（中野三郎）

日中戦争開戦から1年以上経ち、『水可美』にも戦死した同人の名が連なるようになった昭和13年10月発行の第6巻第8号は、出征者の慰問を主とした特集号となったが、稲子は兵士の家族を思いやる歌を、三郎は戦地にいる弟のことを想う歌を詠んでいる。

〈皇国の御国の楯となり給ひし兵の家族（うから）の心憶ほゆ〉（中野稲子）

〈あはれなる吾れの願ぞ弟の姿もとめてニユース見に来つ〉（中野三郎）

そして、このような日常のなかで詠われる歌と、冒頭で紹介した吟行で詠われる歌を併せて詠むと、二人の過ごした時間が、80年以上前とは思えない臨場感で迫ってくる。そこには人の「生」そのものを感じる、文学の楽しみと魅力があふれている。



『水可美』第1巻第7号（昭和8年8月）
「長門峡」を題詞とした中野稲子と三郎の短歌が並んで掲載されている。

宇佐川正明と中原中也と『末黒野』と『水可美』

原　　明　子（中原中也記念館・学芸担当職員）

昭和８年に創刊された短歌雑誌『水可美』の同人には、小川五郎、山根芳一、中野三郎、田村盛一らがいたが、その一人に宇佐川正明がいる。

宇佐川といえば、山口中学四年生であった大正11年、紅萩と称して、当時山口中学２年生であった中原中也と、吉田緒佐夢を交えた三人で合同歌集『末黒野』を出版している。その後中也は山口中学を落第し、京都の立命館中学に転入。短歌を離れ、上京して詩人としての道を歩んでいく。

一方の宇佐川は、山口の歌壇で活動し続け、『水可美』でも編集同人としてほぼ毎号に短歌を寄せている。その歌は、日常生活や自然を詠んだもののほか、家族を詠んだ歌も多い。また、短歌作品のみならず、途中からは山川千冬の筆名で同人の批評を書いたり、「左千夫の歌論」（第３巻３号）、「正岡子規鑑賞」（一）～（三）（第３巻10号、第４巻１号、第４巻３号）といった評論なども執筆するなど、『水可美』誌上での活躍ぶりがうかがわれる。

右 吉田緒佐夢、左 宇佐川正明（紅萩）

第１巻第４号の「消息」欄には山口市から萩に引っ越した旨が書かれており、「宇佐川正明氏送別吟行」が行われた様子が掲載されている。その後、宇佐川は第１巻６号で、「萩に移りて」と題して10首を寄せ、山口市を離れたあとも変わらず『水可美』に作品を発表し続けた。

中也が山口を離れたあと、二人は再会することはなかった。宇佐川が『水可美』第２巻第12号に「防長新聞歌壇の回顧」を発表しているが、吉田緒佐夢についての言及はあっても、防長新聞歌壇に掲載された中也の作品についての言及はない。東京で詩人としての道をきわめた中也と、山口の歌壇で活動し続けた宇佐川の、立ち位置の違いを感じさせる。

宇佐川は、中也の死後、雑誌「詩園」誌上で、〈詩人としての確かな足跡を残しながら、大成の途上で亡くなつた中也君を思ふと、おのづから眼がしらが熱くなつてくる〉（山川千冬「末黒野時代の回想」――中原中也君のことども――）と回想している。

宇佐川は、『水可美』創刊号に「吾子」と題して10首寄稿し、その後も折に触れて子どもを詠んだ歌を寄稿するなど、子煩悩な一面が垣間見える。これを読むと、〈雨に、風に、嵐にあてず／育てばや、めぐしき吾子（あこ）よ、〉とうたった中也の詩「吾子（あこ）よ吾子（あこ）」と通じるものを感じさせる。中也はしばしば山口に帰省しているが、特に昭和９年12月、10月に生まれたばかりの息子・文也に会うために山口に帰省し、翌３月まで長期滞在していた。もし、このとき宇佐川と山口で再会していたら、子どもの話題で盛り上がりまた交友が復活していたのかもしれない。そんな楽しい想像が膨らむ。

かつては、吉田とともに合同歌集を出し合った中也と宇佐川の、遠いようで近く、近いようで遠い距離感が、この『水可美』からほのかに感じられるような気がしてならない。

歌誌『水可美』から見る歌人宇佐川正明と俳人種田山頭火

髙　張　優　子（山頭火ふるさと館・学芸員）

『水可美』は歌誌であるが、防府に生まれた自由律俳人、種田山頭火についても、誌面から窺えることがある。『水可美』で活躍した宇佐川正明（筆名・山川千冬）が、昭和13年から14年にかけて当時湯田に住んでいた山頭火と非常に親しくしていたことは、和田健によって発見された宇佐川による『防長新聞』の記事①や宇佐川の遺稿「山頭火雑記」②からも明らかになっていることである。

『水可美』の消息欄を見ると、宇佐川について「山口の某々所にて俳人種田山頭火氏と歓談の折、山頭火氏感激の極山川氏の如き人物は他に見当らぬ、山口一の男であると口角泡を飛ばして褒められた。」③、「俳人山頭火氏の行脚に際し前夜二人で宴を張つた。」④というエピソードが掲載されており、二人の親密さが窺える。

実は山頭火の日記には宇佐川はほとんど登場しない。はっきり名が出てくるのは昭和14年6月10日に

> つゞいて千冬君来訪、白船君を送りだしてから、同道して山口へ出かける、Kで飲んだ、Yさんも来てくれた、酔うて夜更けて夢中で戻って寝た。

とあるのみだと思われる。「山口の某々所にて」のエピソードは、消息欄を編集した宇津木左久間による多少の脚色を考慮したとしても、山頭火が宇佐川をどのように評していたか推測するひとつの端緒にはなるだろう。

また「山頭火氏の行脚」というのは昭和14年3月31日に湯田を出発して伊那を目指した旅であると思われるが、同年3月22日から3月30日までの山頭火の日記は残っていない。「宴を張った」エピソードは、『水可美』消息欄によって初めて知られることである。

さらに『水可美』を見ていくと、第七巻第七号（昭和14年8月）には、『防長新聞』昭和14年3月15日号に掲載された宇佐川の「飄々として—山頭火句集「孤寒」を読む—」が転載されている⑤。宇佐川はこの中で

> 歌でも句でも先づ「詩」でなければならぬ。「詩」のない歌や句はいかに形式が整つてゐても価値のないものだといふことが出来るが、掲出の句にはいづれも「詩」がある。（略）近頃ある一派の人々の歌や句を見て「詩」のないものが多いので驚いてゐるので敢て云ふのである。

と書く。歌誌に句集の書評を載せたのは、単に山頭火の句集を紹介するためだけではなく、歌も“「詩」でなければならない”ということを山頭火の句から学ぶことができると言いたかったためではないだろうか。

なお同号には宇佐川の自由律俳句が8句掲載されている。この時期の宇佐川は山頭火から大いに影響を受けていたと言えるだろう。

山頭火第六句集『孤寒』

---

① 和田健「宇佐川さんと山頭火」（『種田山頭火ノオト』No.4・昭和58年・種田山頭火研究会）
② 和田健『山頭火よもやま話』（平成13年・山頭火ふるさと会）
③『水可美』第七巻第三号（昭和14年3月1日）
④『水可美』第七巻第四号（昭和14年4月1日）
⑤『孤寒』は昭和14年1月発行の山頭火第六句集。

「水上叢書」の概要

井　関　和　彦（山口県立山口図書館・主査）

郷土文芸誌『水可美』の発行元である「水可美発行所」は、いくつかの図書を発行しており、その多くには、「水上叢書」というシリーズ名が冠されています。『水可美』第２巻１号（1934.1）の裏表紙裏には、水可美発行所の広告が掲載されており、それぞれ「水上叢書」の第１編と第４編であると表記され、その傍らには「予告」として、他にも６編の「水上叢書」が刊行される旨の記載があります。今回は、この「水上叢書」の刊行について、調べたことをいくつか報告したいと思います。

「水上叢書」の第１編『歌集 青蜩』（水可美発行所　1934.1）は、『水可美』の編集同人であった津崎晧の第一歌集として刊行されました。昭和13年に亡くなった津崎には、このほか、遺構歌集である『秋沙』（津崎静子 編　水可美発行所　1939.8）があり、これも水可美発行所から限定70部で刊行されています。『秋沙』には、「水上叢書」の表示はありません。また、「水上叢書」第４編として刊行された『歌集 かたばみ』（田中穣　1933.11）は、刊行直後に亡くなった田中直民[1]の歌集です。本書の標題紙や奥付には「水上叢書」の語がなく、発行者は「田中穣」、発売所が「水可美発行所」となっています。『水可美』第２巻１号（1934.1）p37の「消息」には、「歌集かたばみ、故田中直民氏の遺稿集である。この度水上叢書として東京玉川学園にて印刷出版された。」[2]とあるため、水可美発行所からは刊行されなかったものの、「水上叢書」の一冊とされたようです。

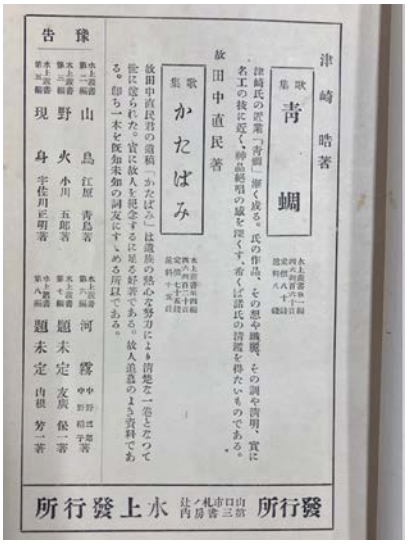
このほか、「予告」には、第２編として江原青鳥著『山鳥』、第３編として小川五郎著『野火』、第５編として宇佐川正明著『現身』、第６編として中野三郎・稲子『河霧』、第７編・第８編として題未定ながら友廣保一と山根芳一の著書が記載されています。『水可美』を代表する歌人らが列挙されていますが、結局、これらは「水上叢書」として刊行された形跡はありませんでした。

江原は、後年、同じ題の歌集『山鳥』（ぬばたま短歌会　1973.2）を刊行しており、小川も、自費出版した妻との合同歌集『春蘭』（小川五郎　1969.12）に、第２部として「野火」を収録しています。宇佐川については、昭和23年に事故で亡くなりますが、その前年にまとめられた自筆歌集が後に発見され、『歌集 虹と時雨』（宇佐川惇子　1982.11）として刊行されました。山根も昭和10年に没し、後に遺文集『桐乃林』（山根百合正　2001.5）が刊行されています。友廣については、晩年になって刊行された第一句集『流るる音』（石川書房　1988.10）に、数は多くないものの戦前の歌が収録されています。中野三郎・稲子については、作品集の類を見つけることはできませんでした。

なお、「予告」にない「水上叢書　第９編」として、中村志保子著『中村志保子遺詠』（水可美発行所　1935.4）が刊行されています。同書の略歴や巻末記によると、水可美防府支社に加わっていたものの、早くに亡くなってしまった中村の追悼のため、支社の有志により刊行されたものとあります。

ここまで、「水上叢書」の刊行についてあれこれ追ってみました。これらの作品集が計画されることで、実際に刊行されたものは少なかったものの、個々に発表された作品が集められ、選ばれ、ひいては後の作品集の刊行につながっていったものと思われます。「水上叢書」の県文学史上の意義は大きいものといえるのではないでしょうか。

※この小文は、クリエイティブ・コモンズ表示4.0ライセンス(CC-BY)で公表します。



「水上叢書」の広告（『水可美』第２巻１号裏表紙裏）

1　「直民」の読みは『角川日本姓氏歴史人物大辞典 35』p274によると「なおと」とありますが、『水可美』第１巻９号（1933.10）p40に掲載の、田中の父親あての電報に「ナホタミキトク」とあるため、ここでは「なおたみ」と読みます。

2　刊行の経緯は『歌集 かたばみ』巻末の「著者記」でもうかがうことができます。

寄贈雑誌（2024年1月～2024年5月）

『文芸山口』第374号（山口文芸懇話会）
『其桃』第933～934号（「其桃」発行所）
『山彦』第180～181号（山彦発行所）
『和海藻』第39号（豊北郷土文化友の会）
『Ceratonia』第3号（シベリア・シリーズ研究）
『文芸阿東』第37号（阿東文化協会文芸懇話会）

清水寺の山門

編集後記

今号では、『水可美』について、中原豊（中原中也記念館・館長）・加藤禎行（郷土文学資料センター・研究員）・池田誠（中原中也記念館・学芸担当課長補佐）・原明子（中原中也記念館・学芸担当職員）・髙張優子（山頭火ふるさと館・学芸員）・井関和彦（山口県立山口図書館・主査）各氏にご寄稿いただきました。なお、これらは令和5年度受託研究「「やまぐちの文学者たち」に係る調査・研究」の成果の一部です。

現在、私（菱岡）は滞在研修で京都を訪れております。観光地は外国人観光客でごった返しており、とりわけ清水寺（きよみずでら）近辺は歩くのもままならないほどです。ところで、弊校にも近い宮野下に清水寺（せいすいじ）という古刹があります。もと天台宗でしたが、大内政弘が真言宗に改めたといい、山口盆地のなかでは最古の寺院とのこと。まだ訪れたことがない方は、ぜひ足を運んでみてください。

（菱岡憲司）

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2024（令和6）年6月10日